

栄光

説教

『命に至る道への招き』

エレミヤ書6章16節
ヨハネによる福音書14章5節〜6節



自由が丘教会牧師・
東京神学大学
常勤講師
田中 光

説教・「命に至る道への招き」 田中光牧師……1
特集・励まされた言葉、書物など…2
西南支区婦人部報告……5
西南支区常任委員会報告……5
説教・「私たちは宝の民」 岸俊彦牧師……6
伝道師の書き込み…7
牧師の書斎から…7
長老のファイル…8

私が大学4年生だった時、人生の岐路に立たされて出会った御言葉があります。「様々な道に立つて眺めよ」という預言者エレミヤの言葉です。私はこの言葉を「自分探し」を促す言葉として受け取り、何とか教会から逃れようとしていました。しかしこの言葉は「自分探し」をけしける言葉ではありませんでした。エレミヤが語りにかけているのは、主なる神に従うことを拒んで、自分の思うままに生きることを選んだ人々です。人々は自分の思うままに道を進むことで、逆に苦しんでいました。エレミヤはそんな人々に、どれで

も好きな道を選べとは言いません。むしろ、たくさんあるように思われる道の中でも特に「昔からの道」あるいは「幸いに至る道」に問いかけてみよ、と語りかけるのです。神がイスラエルに歩むよう勧めている道とは、神の救済の歴史によって形作られてきた道のことです。エレミヤは人々に向かって、そこにこそ問いかけてみよと言っているのです。

ですから、「様々な道に立つて眺めよ」というのは「どれでも好きなものを選べ」という意味ではなく、むしろ行くべき道は多くあるように見えるが、その中で唯一確かな道は、神が備えて下さる神の救済の道以外にないということです。そしてそれこそが「魂に安らぎをもたらす道」であると、エレミヤは言っているのです。大学

生だった私の「自分探し」を正当化する読み方は完全に誤ったものでした。

この御言葉のメッセージを少しずつ理解して、牧会者となる道を歩み始めた私でしたが、その道が「魂に安らぎをもたらす道」であるということはまだ腑に落ちていませんでした。そんな私に更なる転機が訪れたのが、妻と共に最初に赴任した静岡の教会でのことでした。そこで大きな挫折を味わった際、静岡のカトリック教会で司牧しておられた、私たちと年代の近い神父と知り合いになりました。その神父と交わるうちに、自分の霊的な生活が枯渇していることを示され、そして詩編によって祈ることの意義を教えていただいたのです。その後、詩編の御言葉は、留学中も、そして現在に至るまで、私たち夫婦の祈りの言葉となっ

ています。

詩編を祈りの言葉として用いることで私が見出したのは、正にエレミヤ書が言う、主に従う道において与えられる「魂の安らぎ」、より元の言葉に即して言えば「休息」でした。この休息は、神がそ

の創造の初めにこの世界の秩序として定められた休息が既に指し示している、キリストにある永遠の休息のことではないでしょうか。つまりエレミヤが語る休息とは、私たちを罪と死から救ってくださる、「道であり、真理であり、命である」キリストを通して与えられる永遠の命に与ることであり、私たちの存在が、罪や死を克服して根底から新たにされることと関わっています。私はそれが良いものであるということを、神の導きによって詩編を通して知りました。大学時代、洪々「昔からの道」を歩き出した私でしたが、神は不思議な仕方です。私に限り続けてくださり、詩編という書物を通して、「魂の休息」の素晴らしさを拓き示してくださったのです。

私だけでなく、神は皆さんをも常に命の道であるイエス・キリストへと招いておられます。私たちは罪多き、死の悲しみに満ちたこの世にあっても、この道を行くことで、キリストにある真の休息に与ることができるのです。共にこの道を行ってみませんか。祝福を祈ります。

(振起日礼拝説教)

励まされた 言葉、書物

自宅で過ごす時間が多くなり
読書の時間が多くなった、という人も。
あるいは家の中を整理していて、
昔の手紙を読み返してみた…など。
聖書をはじめ、私たちはいつも
たくさんの言葉に励まされて生きてきました。
そしてこれからも、もっと出合うことでしょう。

名画に出会って

岡田映子

この夏の酷暑続きの中、在宅を強いられ、エアコンの効いた部屋を出ずに何をすればと手にしたのが『放蕩息子』の帰郷―父の家に立ち返る物語―と題した本でした。作者はカトリック司祭のヘンリ・ナウエン。ルカによる福音書15章の『放蕩息子のたとえ』からレンブラントが晩年に自分の人生に重ねて描き上げた名画『放蕩息子の帰還』は、サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館に展示されています。

ナウエンはこの絵の複製ポスターに出会い、以来7年にわたり様々な黙想を書き留めました。

放蕩息子である弟は父から沢山の財産を分けて貰い、家を飛び出て自分の好きに生きようとしたが全てを失い、人間と見なされない孤独感を味わい尽くすことで父の子である事に気付き、向きを変えて家に帰り父の前に跪きま

す。一方、兄は嫉妬や不満が一杯で、父との和解に困惑しています。父は既に年老いていますが、息子たちを救し、慰め、共に喜んで欲しいと手を差し伸べています。

ナウエンは自分がまさに弟そのものであるという体験、そして不満が一杯の兄でもあると気付き、最後に父のような事を望みます。司祭としての今迄の苦しみの歩みを経て、父なる神の無限の愛から湧き上がる祝福を差し出す召命感を新たにされるのです。

私はこのたとえ話に聞く時、悔い改めの勧めを素直に心に留めることが出来ましたが、そこでストップして、兄や父の思いの深さまで気持ちの移入が出来ない者でした。司祭によるこれ程までの黙想の広さ、深さは神の愛に生きることを教えてくれます。

私には50歳前後の息子が2人いますが、それぞれの生活の大変さに一喜一憂させられながら祈り見守っています。私達が信じている父なる神の愛に気付いてくれる日が早く訪れることを願っています。この本に出会えたことに感謝して。

コロナ禍の中の私

石垣 章

4月、5月と、緊急事態宣言で戸外の運動も難しくなり、近隣の散歩やウォーキング位しかできなかった。

礼拝も公共交通機関利用を自粛することから、リアルは難しくなり、ライブ配信を利用することに。月定献金もインターネットで振込対応とした。

5月連休明けの8日金曜日、前夜から38度超えの熱が出て、地元の掛かり付け医の発熱外来へ。事前に電話の上、午後2時過ぎに医院に行く。早速体温を非接触型体温計で測ると37度8分と出た。別室で医師の診察。胃の膨満感、熱っぽい。血液検査をして30分後に検査結果を聞いたが、原因がよく解らず、コロナ検査なら立川の病院にPCR検査の予約を入れるかと。是非と依頼。4時の予約が取れ、すぐにタクシーで病院に向かう。

病院に着くと、救急入り口にPCR検査用のテントがあった。一通りの手続きを経て、検査結果は2日後に自宅に連絡する、自宅に居てくださいとのこと。

その後は熱も下がり、普通に夕食をとり、翌日も平熱で普通の食事をして過ごした。

10日曜日午前10時頃、立川の病院の医師から電話で検査陰性の通知。ただ、暫くは自宅で様子見するように言われた。

12日まで平常だったものの、その夜から再び39度を越える熱、胃の膨満感もあり、体の変調を自覚。翌朝まで待ち、掛かり付け医に電話、即、立川の病院に入院となった。

病院では、血液検査、MRI検査など。昼前に入院してからは、食事無し。翌朝CT検査、鉄分飲料付MRI検査を行い、結論として胆管炎を疑い、翌14日午後15時に視鏡による胆石等を除去する手術を行うこととなった。

手術は上手く行き、熱は37度前後に下がり、その他の数値も徐々に下がって23日に退院できた、という次第である。

思い出す御言葉

坂出富美子

今年の誕生日で豊海（夫）は90歳、私は86歳。平素より整理の苦手な私に、いつも身辺を爽やかにするように言われています。

つい先日、仲良くしていた従兄弟が旅立ちました。私より1歳年下の彼は「豊海ちゃんの葬儀委員長は俺がやる」と言っていました。が順番が逆になりました。

私たち夫婦は共に「死」と向き合う年となり、命のことは神様がお決めになることと思っています。まだ召されないのは「あなたにはまだ、この世でやるべきことがあるから」と教わりました。

タイミンク良く出版された『死という最後の未来』石原慎太郎・曾野綾子著（幻冬舎）を読みました。その中で「人には生きて果たさねばならない義務がある」と、曾野さんの言葉もありました。同時代を生きた両著者の言葉には共感する箇所が多々あり、一気に読

み終わりました。

小学生で体験した、一夜にして焼けつくされた空爆、原爆、戦中、戦後の食糧難、母について農家を訪ねた買い出し。焼け跡の空き地には闇市が立ち、物が出回るようになりました。少しでも上を目指そうと夢中で働いた青春でした。焦土の日本を目覚まししく復興させたのは、昭和一桁前後の人々です。今は便利さが追及され新しい物が次々と誕生していく半面、人の心が貧しくなっている気がします。

思いもかけない新型コロナウイルスの発生で、社会の様子が一変しました。倒産、失業、いわれのない差別、屁理屈をこねたルール違反。また地球温暖化で、予想をはるかに超えた自然災害発生の数々、人間の驕りに対する警告かも知れません。体力、気力も衰えた今、私にいったい何ができるのでしょうか。いつもと変わらない朝がやって来て目覚めると、思い出すのは「日々新たな日」「一日の苦労は一日で足る」。50年前、初めて教会に足を運んだ頃、素直に胸に飛び込んできた村田正亮牧師の述べられた御言葉です。

生きていくだけで丸儲け

重藤直樹

もう10年以上前の私の誕生日。底冷え厳しい1月の早朝。鉛のような体を引きずり廊下を進み、居間の扉を開ける。そこには朝日の中に輝く黄色のフリージア。寝起きの頭には夢か現か、瞬時にはわからなかった。

黄色は私の大好きな色。吸い寄せられる。あくまでさりげなくテーブルに置かれた黄色い花束には小さなメッセージカード。「生きてるだけで丸儲け」それが私の誕生日の朝に送られた最初の言葉だった。

その頃、私は人生で最も厳しい窮地に立っていた。要介護度の5の実母との同居は、介護者である我々夫婦の限界を超えていた。それと同時に、私の経営する会社も危機的状况をむかえていた。

母も会社も、すなわち自分自身。逃げ出すことはできない自分の根幹なのだ。しかし介護と経営の苦

難は心身を蝕み、目を覚ますのも恐怖だった誕生日の朝。

私はよろめく体を抑えつつカードを握りしめ、我に返るまでにどのくらいの時間が経っただろう。花束とカードの送り主は同居している息子の妻だった。嫁には極力参っているところを見せていないつもりだったのに、繊細で思いやりのある彼女には全てお見通しだったのだ。

私たち人間は生まれながらにしてかけがえのない神の創造物だ。喜びの時も苦難の時も主が共にあり、私たちの手を引き、足下を照らしてください。どんなに自分が自分に疲れ果て、人が自分をどんなに罵ろうとも、人の価値はそれ以上でもそれ以下でもなく、神の与えたもう命を生きている、神に赦された存在なのだ。

何も見えなくなっていた。生きていくだけでよいのに。主に生きることをただ赦されているのに。当時の私を救ってくださった全ての方々に改めて心から頭を下げたい。自分も苦難の中にある人と共に泣きたい。主にありて明日もただ生きたいと願いつつ。

聖書と祈りと言葉

原 良介

このごろ、様々な書き物から聖書や祈りの言葉を追うことが増えた。以前なら、聖書の言葉は毎週の礼拝で授けられる分で、1週間過ぎずには必要十分と思えた。そのため、とりたてて能動的に御言葉を求めることは少なかった。

ところが、仕事のための実用書を読むことが増えるにつれ、バランスをとるかのようになり、自然と聖書の言葉を追うようになった。自分が必要とするしるべを聖書に求め、安らぎと励ましを得ている。はなはだ陳腐で不適当な表現にも思えるが、聖書はある意味で何にも優る実用書なのかもしれない。さて、教会学校では今年度「パウロの名言」をテーマに礼拝を行っている。毎週の聖書箇所を決めるにあたっては、各教師が扱いたいパウロの言葉を持ち寄った。私は曾野綾子さん著『心に迫るパウロの言葉』を参考にした。様々な

切り口からパウロの言葉が紹介されており、曾野さんらしい鋭い洞察で明快に書かれた文章は、歯切れ良く読みやすい。信仰は比べるものではないが、他人の信仰観は興味深く、自分の信仰を振り返る上でも力になる。

コロナ禍の今、多くの人が励ましの言葉が必要としている。読売新聞では、悩む子どもたちに向けて「#しんごい君へ」と題したコラムを掲載し、いじめ等に苦しんだ著名人が子どもたちにメッセージを送り、話題となった。悩む子どもたちが救われることを願うとともに、言葉が毒にも薬にもなることを改めて感じた。私自身は、コロナ禍で先人の祈りに励ましを求め、様々な時代の信仰者の祈りを集めた、平野克己先生編『祈りのともしび』を手にとった。本の帯には「祈りは天に向かって立ち上る信仰の炎である。どのように祈ったらいかわからなくなるとき、さやかに道を示す小さな灯りともなる」と記してあった。

絶えず御言葉を求め吸収し、正しい言葉を用い、神様と周囲に正しく伝え届ける者でありたい。

西南支区婦人部報告

西南支区婦人部とは何かを知らずに、2016年12月の上野峻一先生の按手札式の日に、前任の委員長から、西南支区婦人部の委員の依頼を受け、西南支区婦人部の委員会で、委員長をお引き受けしました。

婦人部の活動は、月1回委員会、年2回全体集会、年2回教会訪問、総会、会報『せいなん』の発行が主な活動です。委員は7人で構成され、毎月、委員の所属教会で委員会を開催します。月2回他教会で、午前・午後と委員会があるの、台所や集會室をお借りして、日曜礼拝後の愛餐会、婦人会活動について話し合ったりするのはとても楽しい時間です。

女性の社会進出が進み、平日に活動できる婦人の減少により、婦人会が無くなる教会もあり、支区婦人部の新委員募集がとても難しくなってきました。委員の活動負担軽減を考え、2020年度の集會を土曜日に企画しておりましたが、コロナウィルスの感染拡大の

ため中止にしました。

今年は、2019年度総会(3月)、教会婦人の集い(5月)と中止になってしまい、残念でしたが、自粛期間中にライン通話で委員会を2回開催した結果、毎月集まらなくてもライン通話で委員会ができることがわかりました。

10月の講演会は、経堂北教会のホームページをお借りして、オンラインでの配信という新しいかたちでの集会開催になります。

委員長になった私は、月1回の支区婦人部委員会、教区委員会、常任委員会への毎月計3回の出席や、年2回全国教会婦人会連合中央委員会へ出席することで、支区内の他教会の牧師先生や信徒委員、全国教会婦人会連合の中央委員の皆さんとの交流を持つことができ、共に巡礼の旅や祈る仲間もできました。

教会の礼拝出席が少なかった私は、西南支区委員長という立場上礼拝に出席してお伝えすることが多くなり、主日礼拝中心の生活になりました。神様のご計画により、主に導かれて委員になったと思います。(河野昌子)

西南支区常任委員会報告

新型コロナウイルス感染が拡大して以降、私は礼拝出席を控えています。入退院と公共交通機関利用が感染症罹患の恐れとなりました。教会からのお便りで励まされ、ネットによる礼拝のライブ配信で御言葉を頂いています。

西南支区常任委員会は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、早い段階で、「伝道フォーラム」(2月24日)を中止とし、支区総会(3月30日)を延期にしました。

6月になって、初めてZOOMによるビデオ会議を20名足らずの委員で開催しました。所属教会のコロナ対応を紹介し合い、信徒のいない礼拝やライブ配信による礼拝を知りました。支区としては、按手札式、准允式執行は欠かせません。感染予防を万全にし、少数での式を6月29日、霊南坂教会で行いました。お1人3分間の証しによって召命感を伺うことが出来ました。按手札は、張宇成さん(霊南坂教会)が、准允は、久山嵐(中渋谷教会)、島田由紀(青

山学院大学教会)、長手陽介(聖ヶ丘教会)、日高貴十郎(代田教会)の5氏が受けられました。

コロナ禍による礼拝出席の減少も一因となり、教会廃止へと至る教会があるとの報告を受けました。8月に延期されていた支区総会は感染予防のため中止となり、郵送による開催に切り替えました。9月に、郵送で議決された結果が出て、予算承認、新委員選出がなされました。今年度予算の大きな変更点として、教会分担金が免除されました。280万円程の収入不足分は予備金積立金で補填されます。今後、諸集會を計画することとはかなり不可能です。来年の新年礼拝も難しいでしょう。

コロナが終息したら実施したい行事に、前述の「伝道フォーラム」があります。以前、4回行われた「教会フェスティバル」の縮小版で、講演と分団協議を半日でするもので、分団協議のテーマとして、青年伝道、高齢者伝道、学校伝道、インターネット伝道、ワークショップがあります。困難の中でも、望みを懷いて進んでいきたいものです。(松田昭彦)

説 教

『私たちは宝の民』

申命記 7 章 6 節～11 節

ペトロの手紙一 1 章 1 節～2 節

岸 俊彦

この手紙は 1 世紀末、初代ローマ教皇ペトロの名前によって書かれました。パウロも伝道した、現在のトルコに離散していた教会が宛先です。教会は地上を旅する群れです。まことの故郷、御国を指す旅人の群れです。

「イエス・キリストの使徒ペトロ」について、私たちはよく知っています。ペトロはガリラヤ湖の漁師でした。「無学な普通の人」(使徒 4・13)でした。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」(マルコ 1・17)とキリストに言われて、全てを捨て、故郷を捨ててキリストに従いました。キリストと共に御国を目指す、この地上の最初の旅人となりました。「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問われて、「あなたはメシア(キリスト)、生ける神の子です」と真つ先に答えたのがシモン・バルヨナです。その際キリ

ストは、「あなたはペトロ(ギリシャ語の岩)。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」と言われました(マタイ 16・15～19)。その直後、自らの死と復活についてキリストが語られると、ペトロは理解できず、キリストからサタン呼ばわりされ叱責されます。

決定的なのは最後の晩餐でのことです。「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」と言ったペトロに対して、「はつきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」とキリストは言われました(同 26・31～35)。その夜、キリストは捕らえられました。そして大祭司邸で裁判にかけられました。居合わせた者から問い詰められて、キリストの言葉通り、鶏が鳴く前に三度キリストを知らな

いと言ったのです。キリストを裏切ったペトロは、さめざめと泣きながら大祭司邸を立ち去りました(同 26・69～75)。

しかし、復活のキリストは裏切り者ペトロに現れてくださいました。ペトロは回心してエルサレム教会の柱となり、さらには使徒として異邦人伝道の先駆けとなります。そして伝説によれば、逆さ十字架に磔にされてローマで殉教します。

ペトロは、「父である神があらかじめ立てられた御計画に基づいて」選ばれました(1ペトロ 1・2)。主が「宝の民」(申 7・6)としてペトロを選んくださったのは、他の誰よりも小さい者だったからです。

ペトロをはじめ弟子たちは、嵐に遭えば「溺れて死にぞうです」と大騒ぎする者たちでした。「信仰の小さい者よ、なぜ恐れるのか」とキリストは言われました(マタイ 8・23～27)。主に選ばれた宝の民は、信仰の小さいどころか信仰のない者なのです。

裏切り者ペトロをはじめとする 12 使徒も、教会の迫害者パウロも、

その弟子たちも、そして私たちも、父なる神のご計画によって選んでいただいたのです。「キリストの血を注ぎかけていただくために選ばれた」(1ペトロ 1・2)のです。神に背く私たちの罪を贖い、聖め、神との和解を実現するために、キリストはその血を十字架に注がれました。この恵みの出来事を受け容れ、キリストを救い主と信じるように聖霊が生きて働いてくださいます。私たちの内に宿ってくださいます。私たちを選んでくださった神のご計画です。

私たちは、すべての人間が罪と死から救われるための初穂です。神が最も深く配慮し、変わることはない神の愛による初穂です。

ペトロは、バビロンからこの手紙を書きました(5・13)。バビロンとはローマのことです。紀元前 6 世紀のバビロン捕囚と教会の迫害を重ね合わせています。

「恵みと平和が、あなたがたにますます豊かに与えられるように」とペトロは祝福します。主が祝福してくださるから、私たちはまことの故郷を目指して、この地上の旅を続けることができます。

伝道師の書き込み

例年は4月に行われている恵泉女学園中1の教会訪問ですが、コロナウィルスによる休校のため、今年は9月に行われることになりました。

昨年は出席して、様子を見ていただけでよかったのですが、今年は私が担当することに決まっていました。正直に言いますと、まさかこの状況の中で訪問なんてできるものとは思っておりませんでした。

牧師の書斎から



先月号に記したCDプレイヤーは修理の甲斐もなく、また別の所が故障して廃棄となりました。修理した業者が保証できないと言った通りです。運ぶ際に腰を痛め、時間と費用をかけたのに無駄となりました。

以前だったら、今度は何を購入するか、と色々調べてワクワクしたはずですが、それが億劫になりました。年のせいでしょうか。やる

たので、今年はやらずに済むだろうと、少しほっとしていました。こういうことはうまくできる気がしなかったですし、普段教会とかかわりのない子どもたちが教会に触れるチャンスだというのに、私が担当で良いものなのだろうかと思っていたからです。結局やらざるを得なくなったのは、そんな自分に対して、「それではいけないよ」と神様が釘を刺そうとしておられるのでしょうか。

あまりやりたくない私の気持ちはともかく、何にしてもこうして

べきことがそうならないようにと自戒します。

恵泉女学園中学1年桃組の教会訪問がありました。当日教区三役会があり、全て狩野伝道師に任せました。事前の打ち合わせで、担任教師が神学校の同級生の娘さんであることが分かりました。2年前彼が礼拝に出席してくれた時、「娘が恵泉に就職する」とは聞いていました。1年前、神学校の同級生だった大住雄一学長の葬儀で会った時、「娘は友人のいる教会に出席している」と聞きました。

学校が、教会と共に子どもたちに福音を伝えていきたいと考えてくださっているのは、ありがたいことだと感じます。恵泉の担当の方から、「今年は遅くなってしまうが、訪問を実施することで子どもたちに教会での礼拝を知ってもらって、クリスマスにもつなげていきたい」という思いを伺いました。すべての人の祈りの家としても立てられた教会ですから、私たちも送り出された子どもたちを受け入れて歩んでいきたいとの思いを新たにしました。

訪問の日は、教会学校ほどの短めの礼拝をした後、子どもたちからの質問を受ける時間、経堂北教会を紹介する時間を持ちました。教会紹介の中では昨年のクリスマスで上演したCSミュージカルも見せました。よほどインパクトがあったのか、一度しか見せていないにもかかわらず、その後、歌の1フレーズを口ずさんだり、まねして踊ったりする子もいました。改めて歌と踊りの持つパワーを見せつけられた気がします。

(狩野進之佑)

彼がJOCs（日本キリスト教海外医療協力会）のワーカーとしてカンボジアで働いた後、与えられた娘さんでした。娘さんが生まれる前、帰国後の彼とたまたま新幹線で乗り合わせて、「子どもが生まれる」との話を聞きました。

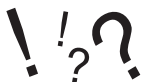
彼の娘さんなら会ってみたいと思いい、任せておいて勝手ながら三役会に間に合う時間まで待ちました。初めて会った娘さんはマスクをしていましたが、彼に似て優しい目をしていました。この4月に大学の同級生と結婚したそうです。

彼はすでに退職して故郷の札幌に帰っているとのことでした。

彼とは年齢も同じです。神学校を卒業して37年余が過ぎました。年だと思うのは本当のことです。「わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです」（フィリピ3・16）とパウロは語りました。正直なところ、御国までの程度到達しているのかは分かりません。年だけは重ねました。しかし、「神の国は近づいた」のですから、今日も悔い改めて福音を信じたいと思います。

(岸 俊彦)

個人消息



掲示板



- 教会バザー 中止
- 神学校日礼拝 10月11日(日) 午前10:15
「わたしが隣人になろう」片岡賢蔵神学生
エゼキエル 16:5-6、ルカ 10:25-37
- 召天者記念礼拝
11月1日(日) 午前10:15 午後2:00
(午前・午後とも同プログラム)
愛餐会 中止
- 合同礼拝・幼児祝福式
11月8日(日) 午前10:15
説教 狩野進之佑伝道師
- 教会創立83周年記念礼拝
11月15日(日) 午前10:15
説教 岸俊彦牧師
- アドベント 11月29日(日)

編集後記



▽まだまだソーシャルディスタンスを取りながらの編集作業です。それでも毎月集まれることに感謝！(沢田)

「栄 光」2020 年 10 月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧 師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑
編 集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

長老のファイル



9月になってから様々な集会がコロナ対策を万全にしながら再開されました。田中光先生をお招きしての振起日礼拝は懇談会はありませんでしたが、共に豊かに守ることが出来て感謝でした。

私自身のことと言いますと、教会学校の新学期早々の説教、司式、「長老のファイル」執筆と、何となく追われている感がありました。でも今回のCS説教箇所、コリ

ントの信徒への手紙の「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」を与えられた時、すぐにエムさんのことが思い浮かびました。

エムナマエさんは昨年3月6日に70歳で亡くなりました。学生時代からイラストレーター、絵本作家として活躍していましたが、34歳の時に糖尿病が原因で失明し、その後、週2回の人工透析も

始まりました。元々が前向きな方でしたが、失明してもエムさんは変わりませんでした。こんな言葉を残しています。「いつか誰でも壁にあたる。そしてドラマがそこから始まる。ぼくの場合、壁は失明という出来事でした。画家であったぼくが失明する。でも、その絶望的な状況にありながらどこかでワクワクしている自分がいたのです」。

病院で看護師さんと出会い結婚、ふとしたことから奥さんの前で絵を描くことになりました。そ

の時の彼女の喜んだ顔と感動が再びエムさんを絵の世界へと戻してくれました。

このコロナ禍で私たちの暮らし方もずいぶん変わりました。これから行われる教会の秋の行事も形を変えて、または時間短縮で、となります。でもこうして毎週御言葉を聞けることは私たちにとって最大の恵みと感謝です。エムさんの言葉を借りて言うならば「大変な状況にありながらもワクワクして、また1週間を始めたい」と思いました。(沢田寛子)